

スポーツが変える。 未来を創る。

スポーツ庁長官 鈴木 大地

私が選手として最初に大きな国際大会に参加したのは、1984年のロサンゼルスオリンピックです。当時は高校3年生でしたが、個人種目では予選落ちでした。しかし、リレーでは決勝に進むことができました。やはり、このオリンピックとほかの大会は全く緊張感が違います。そのオリンピックの中でも、決勝では全く雰囲気違います。決勝は、全身に鳥肌が立つほど選手としての幸せを感じました。

ただし、当時は緊張で下痢になりまして、1週間で4kgも体重が減り、ほとんど気力だけで戦っていました。次のオリンピックで体力をつけて技術を磨いていけば、戦えるのではないかと考えていました。失意の中にも少し光明を見出した大会でございました。

そして、4年後には金メダルを取ることができました。隣にライバルの選手がいましたが、彼らは、たまたま同じ年齢でした。選手たちは、国は違いますが、オリンピックという同じ共通の目的、目標でつながれた友情を育めたことが、何よりうれしかったことの1つです。

私は、スポーツをやっていく中でレベルが上がれば上がるほど、この感動や心の持ちようが非常に大事なることを学びました。オリンピックでも、それに感動し、その感動をまた力にすることができました。そういう選手が、やはり世界で力を発揮することができるのだらうと感じてきました。

引退をしたのは、次の92年のバルセロナオリンピックの時でした。最後となる3回目のオリンピックでは私は出場することもできず、終わりました。

その後は、母校である順天堂大学に教員、指導

者、それから研究者、教育者、色々な形で大学に残りながら活動をしてきました。25歳で引退し、その後は社会のために少しでも役に立つことをしなくてはと思っていました。その後、水泳連盟の役員、オリンピックの役員を経て、水泳連盟の会長に就任しました。さらに、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年に向けて2016年の大会招致委員会の理事にも就任しました。そうしていると、色々な役の話をいただき、今度はスポーツ庁の長官にという話になり、2015年にスポーツ庁の長官に就任しました。

「スポーツを通して 健康促進を進める」

本題のスポーツ庁、スポーツ行政の話をしさせていただきたいと思います。スポーツ庁は文部科学省の外局ということで、文化庁と兄弟庁ということになります。予算は文化庁が1,000億円、我々は330～340億円と約3分の1ということです。現在、約130名体制でやらせていただいております。特徴的なのは、かなり外部の人材が多いことです。これまで各省庁にまたがっていたスポーツ行政を一元化していくというミッションもあり、このスポーツ庁が立ち上がりました。スポーツ庁は、2017年4月から第2期スポーツ基本計画を立ち上げ、国のスポーツの方向性を示してきています。

スポーツとは何かという定義ですが、スポーツのもともとの語源は「デポルターレ」というラテン語です。気晴らし、遊びや、娯楽など日常生活とは違うことをするという意味です。実は、もっと身近なものです。散歩、ハイキング、サイクリ

鈴木 大地 (すずき だいち)

略歴

【学歴】

平成元年 (1989年) 3月 順天堂大学体育学部体育学科卒業
平成5年 (1993年) 3月 順天堂大学大学院体育学研究科コーチ学専攻修了

【経歴】

平成18年 (2006年) 4月 順天堂大学スポーツ健康科学部准教授
平成25年 (2013年) 4月 順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ科学科
コーチング科学コース教授

平成27年 (2015年) 10月 スポーツ庁長官

【役職歴】

公益財団法人日本オリンピック委員会

平成23年 (2011年) 6月 評議員

平成25年 (2013年) 6月 理事

公益財団法人日本水泳連盟

平成23年 (2011年) 3月 常任理事

平成25年 (2013年) 6月 会長

【受賞等】

昭和59年 (1984年) ロサンゼルスオリンピック11位 (100m背泳ぎ)

昭和61年 (1986年) アジア競技大会 (ソウル) 金メダル (100m背泳ぎ、
400mメドレーリレー)

昭和63年 (1988年) ソウルオリンピック 金メダル (100m背泳ぎ)



ング、ダンス、健康体操、こういった活動も立派なスポーツです。非常に身近で手軽にできます。それから、見るスポーツも立派なスポーツ活動の1つです。スポーツへの参画人口を増やしていくことを今我々は進めているところです。

我々の基本計画の中で、スポーツで人生が変わる、そしてスポーツで社会を変えることができる、世界とつながる、それから未来をつくることができるとしています。

まず、成人のスポーツ実施率という指標があります。国民全体ですと、週に1回スポーツをする人は平成28年度成人で42.5%でした。平成29年度のデータでは51.5%まで上がってきました。これを65%ぐらいにしたいと考えております。スポーツ実施率の内訳を見ると、20代は50%、30代は45.4%、40~50代は42~45%。60~70代ときまして、70代になると7割を超えてきます。反対になぜスポーツをしないのか聞いたところ、仕事や家事が忙しいのでできないという答えが一番多かったです。

このスポーツ実施率に我々がこだわる理由としては、国民医療費に大きく反映されることが挙げられます。最近まで20兆円であった国民医療費が、今は42兆円になっています。2025年には52兆円あるいは62兆円と言われています。このことを知り、私は驚愕しました。スポーツを普及、振興させ社会に役立たせることは、スポーツ界の大きなミッションの1つです。

私たちは通勤時間や休憩時間にスポーツをやる、体を動かすことを推奨しています。あるいは、スポーツだけではなく、色々なものをかけ合わせ、

魅力や意欲を向上させるきっかけとしてスポーツをやっていただけるのではないかという発想で、健康とスポーツ、ITとスポーツ、観光、それからファッション、エンターテインメント、文化芸術、こういったところから入って、結果的に体を動かしてもらえるのではと考え、さまざまな施策を講じています。今までスポーツにかかわってこなかった人も、スポーツを楽しめるスタイルを提案しています。

こちらの写真は、1964年の東京オリンピックの国立の水泳会場のサブプールです。朝7時から営業して、これだけの人がきました。医療は、今のシステムを継続できなくなる可能性もあり、これからは自分の健康は自分で獲得していくという時代になっていくと思われま

身近な健康づくりに 1日8,000歩を目標

私は、本日も普通のスニーカーを履いています。これに関連し「FUN+WALK PROJECT」を始めました。一番身近で手軽にできる歩くことをもっともっと普及させたいと思います。1日当たり8,000歩が目標です。1日8,000歩を平均として歩いている人は、歩いてない人に比べ生活習慣病になりやすいといわれていますので、産業界とも連携しながらこのプロジェクトを進めているところです。

アプリもあります。インセンティブもあり、コーヒーやビールを1杯無料などの割引もあります。アプリでは自分の歩数を確かめることができます。企業も応援してくださっています。

それから昨年、厚生労働省とスポーツ庁で、健康増進のための連携会議を始めました。健康行政の中心は厚生労働省ですが、私はスポーツ庁に手伝わせてくださいと申し上げ、一緒にやることになりました。同じ税金を使い何かをやるときに、より効果のあるものにしていくべきではないかと思えます。実際、厚生労働省も健康イベントを開催していますが、これをより楽しく明るく盛り上げていくために必要なのは、アスリートの存在です。花を添えてそのイベントを楽しく明るくやり、手伝わせていただいています。

「 体育授業や部活動にも変化が生まれている 」

次に、体育の授業についてお話しします。中学生のデータですが、今スポーツをしたい学生は6割弱、逆にスポーツは嫌いという学生は2割弱弱いです。スポーツ好きの中学生を増やすために、小学校における体育の専科教員の導入や、体育授業の学習指導要領の改定等を行っています。

私たちはまずスポーツ嫌いを減らしたいとアピールしましたが、色々な人からご意見をいただきました。どうやら、小中高校で受けた体育の授業で、スポーツが嫌いになったのかもしれません。我々にとってはショックでした。早速、学習指導要領の改訂に取り掛かりました。今までのような技術指導一辺倒ではなく、体を動かすことを楽しいと感じてもらい、体を動かすこと自体が楽しい、そういうことをもっと味わってもらいたいと思っています。

スポーツで体をいい状態に保っていくことは、非常に重要です。体を悪くしてしまうと、何らかの形で国や自治体に面倒を見てもらわなければなりません。それよりも、自分が健康で社会に貢献するようなそういった礎を健康であることで築けるのです。

専門の教員であれば、スポーツの苦手な人、うまい人、それぞれに対していい授業が展開できるということで、専科の導入を進めていきたいと思っています。それから、これは体育ですが、

もっと楽しさ、喜びを味わってもらいたいです。それから健康増進、体力の向上に役に立ちます。さらに、見ること、支えること、知ることや自分に合った楽しみ方、かかわり方をどんどん伝えていきたいと思っています。

運動部活動についてもお話しをしたいと思います。運動部活動の参加率をみるとほぼ横ばいですが、高等学校の男子や女子は、少し上昇傾向にあると思っています。一方で、運動部活動に参加してない人もいます。どうしたら運動部活動に参加したいかと質問すると、好きな種目、興味のある種目があるなら運動部活動に参加してもいい、自分のペースで行えるなら運動部活動に参加したい、あるいは友達と楽しくやれるなら運動部活動に入りたいという答えが多かったです。従来の運動部活動に加え、もっと多様なバリエーションを子どもたちに提供することが求められていると思っています。

今度は教員から見た部活動についてですが、こちらの数字は、顧問の先生の中で体育の先生でもなく顧問として受け持っている部活動の運動、これを行ったことがない人の割合です。そういう人たちが中学で46%、高校で41%います。もしかすると嫌々やっているのかもしれない。校長先生の命令でやらされているのかもしれない。もっとかわいそうなのは誰でしょうか。それは、部活の指導を受ける生徒なのかもしれません。もちろん、勉強をして一生懸命取り組んでいる先生もおられます。しかし、もっと生徒にとってよい指導を受けられるような部活動、やりたいことをやらせてもらえる運動部活動にこれから少しずつ転換をはかっていきたいと思っています。

部活動の視察も重ねています。江東区の中学校の女子サッカー部では、自分の中学で11人は集まらずチームが組めない状態です。それで、地域の隣の中学の女子サッカー部と一緒にチームを組んで試合に出ています。副次的な効果として、例えばいじめ対策になります。隣の中学の友達を作り、色々な世界があるとわかるだけでも、何か救われると聞きました。これからいろんなパターンの部

活動を考えていく必要があると思います。この問題については、総合型地域スポーツクラブがその受け皿の1つになる可能性があります。

それから教員の長時間労働です。さらに選手たちの長時間の運動によって、けが、故障が起きていますが、その一方で、部活動を1時間しかやらず全国大会に出場したという高校もあります。

どのように1時間でやるのかを視察に行きました。まず、部員が集合し、部活動が始まる時にまず映像を見せ、今日やること、やってはいけないプレー、推奨されるプレーなどを確認して部活動が始まりました。そうすると理解が早く、本当に時短で色々なことができます。

これまで市町村の代表の人、中学校の代表の人、高校の代表の人、競技機関の代表の人などいろいろな方と濃密な議論を重ね、ガイドラインを作成いたしました。その効果として部活動をどんどん変えていきたいと考えています。

部活で重要なことは まず運動の総量を減らす

まず我々が申し上げたいのは、もっと運動の総量を減らしましょうということです。教員の皆さんにも、少し労働の環境をよくしながらの部活にしましょう。そして生徒も週2回は休みましょう。少なくとも土、日の1日は休みましょう。平日の1日は休みましょうと言っております。

昨年の夏の甲子園大会で900球投げた投手が話題になりました。すごいことだと思いますが、彼の陰には身体の酷使で選手寿命を縮める選手がいるかもしれません。数日前ですが、新潟高野連が投球制限を導入すると報道されました。やはり生徒が、けがや故障で野球ができない状態は教育上もいかがなものかだと思います。アメリカでも、無理をさせません。

将来自分がプロ野球の選手になりたい投手がいるとします。その人たちが、自分の肩を大事にしたいと思ったら、日本の高校ではなくてアメリカの高校に進むかもしれません。あるいは野球ではなくてサッカーや水泳や体操などのクラブに入る

かもしれません。クラブは経営ですから、選手がけがをしないように大事に育てます。いずれ高校野球は、今のあり方を変えざるをえなくなるのではないかと思います。

それから学校単位で参加する大会ですが、これも去年の夏のように暑いと、大会を中止すべきです。オーストラリアでも、気温36度以上になったらスポーツ禁止です。昔に比べ、気温が上がるようになり、大会のあり方やトーナメント方式を見直し、リーグ戦を検討すべきかもしれません。

高校球児は全国で15~16万人います。でも、1年間に1度でも試合に出られる人は、約5万人です。10万人ぐらいの高校球児は、1回も試合に出られないということです。教育が目的であれば、多くの人にチャンスを与えるべきだと思います。

それから、幼児期のスポーツ習慣を定着させたいと思っています。幼児期にどれだけ体を動かし、スポーツをやったかでその後の体力や、その後のスポーツ習慣が大体決まります。幼稚園のときにたくさん体を動かした人は、その後も体を動かすし体力もあるというデータがあります。よって、幼稚園、保育園、その時代にいかに体を動かすかが大事です。

文部科学省は小学校以降の体育の授業等を色々と研究してきましたが、今一番やるべきことは、この幼稚園、保育園児時代のスポーツのあり方や定着です。

幼稚園ではコーディネーショントレーニングと言う色々な四肢の神経を使いながらの運動を取り入れ、運動神経がよくなり、小学校に行ってからスポーツの体力テストではいい結果がでるというデータがあります。幼稚園の時代に体を動かすよう、もっともっと力入れていきたいと思っています。

地域活性化につながる スポーツを拡大させよう

スポーツの別の観点である地域活性化、経済の活性化について少しお話をします。現在、日本のスポーツ市場は5.5兆円ですが、2020年に10兆円、

そして2025年に15兆円にしていきたいと考えています。スポーツツーリズム、周辺産業、テレビのRIGHTS（放映権）などの周辺産業が5兆円です。そういったことで、スポーツ環境をどんどん改善し、スポーツ人口の増加や、スポーツ市場の拡大ができるようにしたいということです。

外国と比較すると、日本はこの10年間でほぼ変わらず、欧米はとてども飛躍しています。15兆円という大きな目標を掲げましたが、中身としては、まずスタジアム・アリーナ改革ということで、全国の体育館、運動場、それからサッカー場などを全国20か所ほどもっとつくります。商業施設も併設させ、常に人があふれて試合のない日も利益を生むような施設にし、活性化させていきたいと思います。

それから、コンテンツをもっと魅力的なものにし、経営力も強化し、そして新ビジネスを創出していきます。そして、スポーツ分野の産業競争力を強化しましょう。他のビジネスとの融合によって、新しい価値を創造しましょう。

皆さんの町でも、町からかけ離れたところにこういう施設が多いかと思いますが、これからは町の中につくり、商業施設や病院や色々な施設と併存し盛り上がっていくパターンです。これが今世界の共通認識になっています。

広島市民球場は私も視察させていただきましたが、市民球場というよりアメリカのボールパークに近かったです。入っただけでわくわくする楽しさがまずあります。そして、色々な人たちがバーベキューをやり、球場に行きます。車椅子やベビーカーなどを使用される人たちにも優しいと感じました。野球を純粋に見たい人は3割だそうです。

一方、選手は、大勢の中でプレーしたいと思っています。Bリーグができましたが、1年過ぎたころに選手にこれまでと何が変わったかを聞いたところ、よく練習するようになったということです。観客がたくさんいると、競技力の向上にもなるわけです。

ツーリズム、インバウンドも増えています。こ

のインバウンドの中で、スポーツ目的のインバウンド、これももっと我々は倍増していきたいと考え、250万人が目標です。そして、消費額も4,000億円を目標にしていきたいと思っています。色々な成功事例があります。群馬県水上町は温泉の町でしたが、最近はスポーツツーリズムでも非常に有名になってきました。温泉だけでなく河川もありラフティングが盛んで、大変人気だそうです。しかし、これをやろうと先陣を切ったのは、ニュージーランド人のマイクさんです。

それから、富山県では廃業したスキー場が現在はトレイルランのメッカになりました。このようにスポーツによって地域は活性化し、経済効果もあります。また、認知度が高まり、住民のプライドが高まることになります。

先ほどスタジアム・アリーナ改革の話をしたけど、やはりスタジアム・アリーナはお金と時間がかかります。そこで、お金のかからないスポーツ振興をやろうじゃないかということで、アウトドアスポーツ推進宣言を2017年にしました。これは、皆さんにとっても使えると思っています。私もさっそく岩手山に登りました。登っている最中はすごい雨降り、ようやく頂上に着きましたが、何も見えませんでした。二度と登るかと思いましたが、不思議なもので下山して数日たったら、また登りたいと思うわけです。自然の力、アウトドアの力はあると思います。

白馬のトレイルランには、去年参加させていただきましたが、このときも大雨でした。捻挫してしまっただけですが、不思議なもので1週間ぐらいするとまた走りたいと思うのです。自然というのはやはり人を引きつける力があります。実は、白馬は1998年の長野オリンピックで競技会場になり、運営、経験、これがレガシーとして残っています。さらに、若い人たちが積極的に絡んでいます。そういうものがこの大会につながって、私も走りまわりましたし、渡部暁斗君も走りました。上村愛子さんもスターターとして来ていました。白馬は、人口当たりのオリンピックが一番多いと思います。よって、地域それぞれがチームワークでみんな一丸と

なってやればできると思います。

今年、我々が力を入れているのは、武道ツーリズムとアウトドアスポーツツーリズムです。これはさきほど申しましたように、山、川、ダムや海があり、必ず皆さんの町にスポーツの資産、宝が眠っています。これを掘り起こしていただきたいと思います。「うちの町は何もない」と思う人がたまにいらっしゃいますが、恐らく交通量や信号も少ない町なのでしょう。これは、駅伝などの練習に最適なのです。そういう可能性が、必ず皆さんの町にもあると思っています。

そして、今力を入れているのが武道ツーリズムで、日本のキラコンコンテンツとなります。ビデオをスポーツ庁でつくったのですが、この短期間に約300万回再生されています。是非、皆さんもご覧になってください。「日本の武道」は、世界の人々にとっては魅力的です。よって、地域の小学校、中学校や高校の部活動を外国人に体験、見学してもらいます。さらに、その地域の特産品などを組み合わせればビジネスになります。簡単に言い換えます、外国人からの拝観料みたいなもので部活動が賄えるのではないかとしたりもしています。大事に育てていきたいと思っています。

これから大きな国際大会が次々と開催されます。大会が成功するためには、地元の日本人選手の活躍が不可欠です。最大限のサポートをしているところです。今年バレーボール世界選手権、フィギュアスケートの世界選手権、女子ハンドボールの世界選手権が日本で開催されます。そして大事なのは2021年以降で、2020年まではラグビーワールドカップやオリンピック・パラリンピックなどで盛り上がりますが、参加するにはハードルが高過ぎます。しかし、2021年の関西ワールドマスターズゲームズでは、一般の人が申し込めば出場できます。スポーツを実践できる、そういう国にしていきたいと思っています。

全国の将来性豊かなアスリートを 発掘するJ-STAR PROJECT

最大限の強化事業を進めていくために、色々な

プランを考えております。その1つが、「J-STAR PROJECT」です。これは選手発掘、選手の種目転向のプロジェクトです。

先ほど申し上げた高校野球では、5万人しか試合に出場できません。10万人は応援か、球拾いとなります。その中に、身長が高い人や足の速い人がいるとしましょう。ほかの競技であるとスーパースター、日本代表です。これまでと少し違う種目に挑戦することで、オリンピックに出場する可能性が出てきます。目先を変えれば、日本代表になることができます。そういうチャンスを見逃さぬよう「J-STAR PROJECT」で行っています。中学校や高校でやる体力テストの数値を打ち込んでもらっただけでいいのです。測定会に呼んで中央競技団体が国の育成事業でその選手を強化して育成させようとする仕組みです。

1人の有望な選手が成長する過程では、色々な人の影響を受け、その選手ができていきます。小学校や中学校のときに手ほどきを受けた先生、今メダルを取らせてくれた先生、指導をされた先生方の名前を表彰し評価すべきだと思います。関わる人も含め日本全体で力をあわせ、国の宝である選手を育成していきましょう。皆さんにも、ご協力いただきたいと思っています。

その事業の測定会では例えば、飛込競技は水泳競技ではありませんが、体操競技に似ています。飛び込む際に回転をし、入水します。この中で水泳と呼ばれるのは、入水してから岸まで泳ぐ2mだけになります。あとは体操競技に似ています。体操の1.5軍の選手に声をかけたところ、挑戦してみたいという選手がけっこういました。体操競技出身でありながら、飛込競技で全国3番になった人がいます。少し考え方を考えるだけで、そういう選手としても輝けるのです。

それからインテグリティ（誠実さ）ですが、各界でも不祥事や不正はあります。我々が率先してきれいにしていくことが重要です。そのことも踏まえ、1億総スポーツ社会を目指してまいりたいと思います。